

平成 27 年度 東京外国語大学オープンアカデミー
東京外国語大学語学研究所 企画
『言葉とその周辺をきわめる -4- 』
2015 年 10 月 6 日 (火) 第 1 回
「スイス・アルプスの少数言語ロマンシュ語
—その過去・現在・未来—」
東京外国語大学名誉教授
富盛 伸夫

1. はじめに

今回のお話は、東京外国語大学の言語学・言語教育学系研究所である語学研究所がオープンアカデミーの一環として数年来開催している『言葉とその周辺をきわめる』という統一テーマに沿って行います。タイトルは『スイス・アルプスの少数言語ロマンシュ語』、副題には「その過去・現在・未来」がつけられています。さらに第二の副題をつけるとすると、「ゲルマンとロマンスの狭間で」ということになりますが、具体的にはその歴史や現在、さらにその未来に至るまでを俯瞰しつつ、この言語の概要を紹介できればと願っています。

実は語学研究所は 2011 年に『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』と題したテーマでオープンアカデミーを開催し、その第一回目に私自身が同じロマンシュ語について担当しています。この記録は冊子体の他に語学研究所のサイト¹でも公開され「出版物」というプルダウンメニューから PDF で参照できるようになっているので、是非ともご覧ください。ロマンシュ語のロマンス系言語としての歴史と音声・形態論の概要はそこで述べられていますので、今回は特に現在と将来に関わる言語問題としてのロマンシュ語に重点をおいて考えてゆきたいと思います。

この言語の過去も、そして現在も、隣接するスイスのドイツ語に強く影響を受けているのが現実です。20 世紀初頭にサンモリッツに近い村シルス・マリアを訪れたフランスの作家マルセル・ブルーストは人々の話すロマンシ

¹ http://www.tufts.ac.jp/common/fs/ilr/images/publications/2011booklet_ver2.pdf

ュ語を聞いて、イタリア語のように力強い肉感的な母音の響きと激しくぶつかるドイツ語の子音の響きを感じたと書いています。現在のロマンシュ語話者の人々のジレンマは、内なるロマンス系言語としての感性和、すでに自分が母語としても持っているドイツ語（つまりゲルマン語）的な言語感覚とが衝突し干渉しあっていることからきているようです。マスメディアや学校教育などをはじめ日常の職業生活など外での活動にはドイツ語を駆使しなければいけない複数言語併用者である現地の人々の心情。もう自分たちの言語・文化圏とドイツ語・ドイツ文化圏とがアイデンティティ的（自己確認的）には区別がつかないくらいまでになっているのかもしれませんが。この言語の未来を考えると、はたしてロマンシュ語の言語文化のレガシーはいかに回復され維持されるのか、という問題意識をもってご一緒に考えていければ幸いです。

2. スイスという国

スイスの面積は九州より一回り大きく、左に90度横にしたイメージだと思ってください。博多から鹿児島まで行くという感覚は、ジュネーブから反対側のザンクト・ガレンを超えてリヒテンシュタインの方まで達する距離感です。

スイスの人口は約800万人、26の「州（カントン）」（ドイツ語 Kanton、



図1 スイス全土（Google 地図より）

ロマンシュ語 Chantun「チャントウン」）が大きな自治権を持っている連邦共和制の国家（ロマンシュ語では Confederaziun Svizra「コンフェデラツィウン・シュヴィツラ」）です。スイスはヨーロッパの中心部に位置しているながら、意外なことに、EUに入っていません。しかし、そのEUを作るときには非常に協力した。さらに、EUの言語政策のひとつ、『欧州共通言語参照枠組み』

（CEFR, Common European Framework of Reference for languages）を策定するときにも中核的役割を果たしています。

かつて 20 世紀の世界大戦間、国際連盟の時代にはスイスは一早く国際連盟に入った。大戦後に国際連合ができたときに、スイスは一応加盟しようかと考え、国連が中立かどうかと確かめた、という。すると国連は『中立ではない』との返事。そこで、スイスは永世中立が国是ですから、国連には入らなかったということらしい。以前、私はスイスが中立を保つため国連にも EU にも加盟しない、と説明してきたのですが、2002 年の国民投票で今の国連に加盟するかどうかを問うたところ、6 割くらいで賛成票が多数となり、国連加盟を決定しました。もともとスイスは国連に入る前から 150 億円くらい供託金出しているので実質的な貢献はしている。不思議な国ではあります。

スイス国民の発想についてもうひとつ加えると、徹底した自己防衛の手段を持っています。もちろん平和第一主義の憲法がありますが、空軍も（なんと湖の）海軍もあります。万が一周辺から敵がやってきたら、敵に自分の資源を利用されないため、まず道路や橋を破壊し食料倉庫や弾薬庫などを先に焼いてしまいます。これをナチスに対してもやる覚悟でした。だからスイスに攻め入っても、そこには何も無い。もともと資源のない国ですから、お金も武器も麦も何も無い、となると敵は攻めてこないだろう。これを「焦土作戦」というらしいのですが、スイスは何か発想がすごいです。この生命をぎりぎりのところで晒してまでも自分たちのテリトリー、さらには言語と文化価値を護ろうとする意志の強さは、そのままロマンシュ語を持続的に維持しようとする現地の人々に受け継がれています。

3. ロマンシュ語の現在：使用地域と話者人口

さて、ロマンシュ語は主にスイスの東南端にある人口約 20 万人のグラウビュンデン州（ドイツ語名 Kanton Graubünden, ロマンシュ語名 Chantun Grischun 「チャントウン・グリジュン」）で、約 35000 人によって使用されています。スイス全体の人口が外国人居住者を含め約 800 万人ですから、0.5%にも満たない話者人口です。図 2²を見ると、北は茶色のドイツ語圏、西は濃い色の地域のフランス語、南は黄色のイタリア語圏に挟まれており、それぞれドイツ、フランス、イタリアに地続きで接しています。南東に位置

² Gross, Manfred *RHAETO-ROMANSH : facts & figures*, Chur, 2004. P.23 から転載。

するロマンシュ語地域（緑色の部分）にドイツ語の部分が入り込んで複雑な言語境界線をつくっていることもわかります。

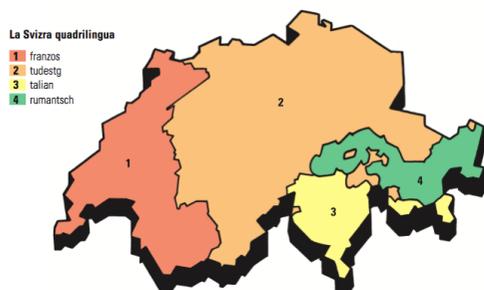


図2 スイスの国土と言語分布

1. フランス語地域
2. ドイツ語地域
3. イタリア語地域
4. ロマンシュ語地域

どの国でも同じですが、言語人口の数字には注意を要します。スイスでは19世紀後半から10年毎の調査が行われ、言語項目「あなたの母語はなんですか？」に国民は答えてきました。ところが「母語 (lingua materna)」という概念そのものが曖昧で回答者の判断に委ねざるを

えません。いわゆる母語は必ずしも母親の言語である必要がないし、多言語併用話者の場合、ロマンシュ語やドイツ語・イタリア語など複数の言語を受け継いでケースがほとんどです。また母語を話せると言っても同じように十分に使えるとは限りません。そこで1990年からは「最も良く使える言語 (megra lingua)」は何か、という質問に変えています。するとその前回の1980年では51128人(0.8%)であったロマンシュ語人口は急に下がって、1990年国勢調査では39632人(0.6%)になりました。それまで『ロマンシュ語が母語である』という認識をした人たちには、10年後には『より表現しやすい言語』とは思わなくなった人が相当数いたということですね。たしかに親から受け継いだ母語ではあるけれども、使いやすいのはたぶんドイツ語であったりするわけです。

しかし、上の聞き方では、どこで、だれと、どのような話題と状況で使うのか、という発話のコンテキストが曖昧です。例えば『何か文章を書くときにより良い』または『仕事で話すときにより良い』、さらには喧嘩をして『怒鳴りつけるとき』のに使いやすい言語が変わる可能性があります。そこでさらに質問を拓げることになりました。「最も良く使える言語」であり、かつ/または「家庭や学校で、かつ/または職業的にも話される言語」という設定ですから、ロマンシュ語を少しでもどこかで使っていれば話者として選択してしまう様になっています。特段意図的な調査をしているわけではないと信

じますが、1980年以前のデータと比較できないのも事実です。結果、1990年からはどこかで誰かと少しでもロマンシュ語を使っている人が66000人（1%）を超えました。何か数字のマジックのようにも見えますが。

Languages declared as main languages, 2014

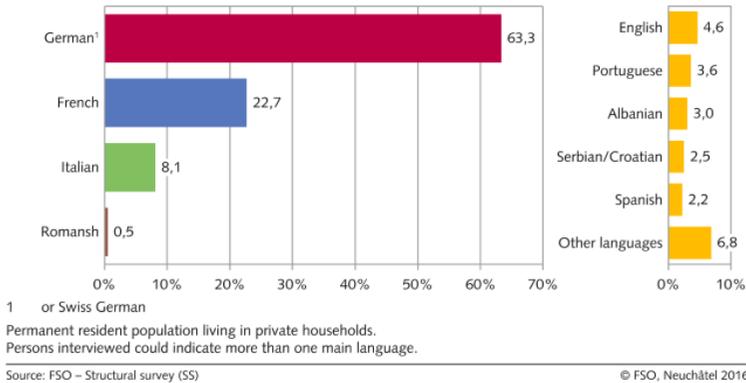


図3 スイスの言語人口比率(複数回答可、2014年調査)

スイスの国勢調査は2010年以降、大きく方法を変えました。労力がかかる全戸調査からサンプル（1000人）抽出調査に切り替えて随時科学的統計処理をした数値を算出するようにしています。2016年に公表された2014年調査のスイス連邦統計局の統計³では、ドイツ語またはスイス・ドイツ語（63.3%）、フランス語（22.7%）、イタリア語（8.1%）、ロマンシュ語（0.5%）という数字を出していますが、図3を見るとスイス国内に居住する英語（4.6%）、ポルトガル語、アルバニア語、セルビア語・クロアチア語、スペイン語より少ないことがわかります。ちなみに、これらの言語の人が多い社会的背景には、スイスが短期滞在型の外国人労働者を多数受け入れることで社会インフラの確保をはかってきた現代のもうひとつの側面があります。

スイス人口の200分の1に満たないロマンシュ語は、ヨーロッパの少数言語の中に数えられています。『ヨーロッパ地方言語・少数言語憲章』（ECRML, European Charter for Regional or Minority Languages）は1997年12月23日批

³ スイス連邦統計局のサイトを参照。

<https://www.bfs.admin.ch/bfs/en/home/statistics/population.assetdetail.333426.html>

准され、イタリア語方言とともにロマンシュ語が指定されています⁴。また、世界の危機言語に関する研究組織サイトである「エスノログ(ethnologue)」では⁵、この言語が、グラウビュンデン州の州法第3条1項で公用語のひとつ

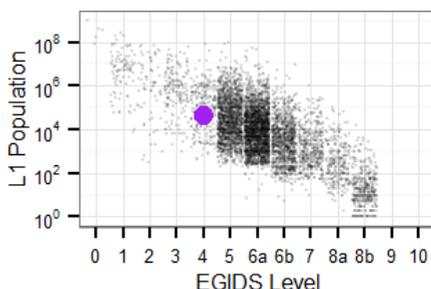


図4 エスノログの危機認定 (丸印)

つに認定されており「制度的に支援された広範な教育システムを通して標準化と文章語が維持され活発な使用状況にある」と判断しています。「家庭や共同体を超えた制度によって維持されるレベルまでに進展している」との評価を得て、危機言語レベルは0~10のうち4 (educational) となっている。ロマンシュ語は

スイス憲法や州の法律、教育制度や支援事業への補助など、確かに他の多くの放置された状況にある危機言語と対比すれば格段に恵まれた条件が整っているとは感じます。が、それこそ、スイス国民自身が強大国の狭間において内に団結し、長い厳しい困難をしのいできた歴史を共有し、スイスで最も小さな言葉を支え続けることの意義を認識できているからこそ、の結果であると私は思います。ただし、万が一、その共感が削がれることがあれば、ロマンシュ語は一举に消滅の危機に瀕する可能性がないとはいえません。

4. ロマンシュ語はどのように形成されたか

ウィリアム・テルの伝説で知られるスイス発祥の地、スイスの中心部にあ

る3つの小国ウーリ (Uri)、シュヴィーツ (Schwyz)、ウンターヴァルデン (Unterwalden) は1291年に神聖ローマ帝国のハプスブルク家の横暴に対して自主同盟を結び、スイスの原型となりました。スイスという国名はそのひとつの州の名、「シュヴィーツ」(古いゲルマン語で「酪農場」を意味したとか) からとられたといえます。

ローマ時代には、ジュリアス・シーザーの『ガリア戦記』にも出てくるケルト人の部族が住んでいた平野部のヘルヴェティカ (Helvetica) 地域と山岳

⁴ https://en.wikipedia.org/wiki/European_Charter_for_Regional_or_Minority_Languages

⁵ <https://www.ethnologue.com/language/roh/17> 参照。

地帯の非ケルト人系のレチア (Raetia) 地域がありました。もともと先史時代のアルプスには他とは異なる言葉 (レチア語?) を話す勇猛な民族がいたことが知られていました。地名研究から、今のジュネーブ、ジェノヴァ、などの原形は「水の都」を意味していた、という説もあり、紀元前 1500 年以前は今のスイス全部をさらに南北に広げた広大な地域、ローマ人が Raetia Prima と呼んだ範囲にレチア族が住んでいた。そこに、ケルト人たちが東から侵入、定住したというのが定説です。レチア人とは、もともとはイタリア半島の先住民であったエトルリア人がアルプスに追われて逃げ込んだ民族だ、とローマの歴史家書いているのですが、民族とロマンシュ語の祖先についての文献資料はなく実態は全くわかりません。

ところが 1991 年、海拔 3210 メートルのイタリアとオーストリアとの国境分水嶺付近でトレッキングをしていた夫婦が偶然雪の中からミイラ化した



図 5 アイスマンの復元像

人体に気付いて通報、調査すると現代人の遭難者ではないことが確認されたことから、レチア民族の祖先論争が始まりました。この「アイスマン」あるいは発見された谷の名エッツから「エッツィ」(Ötzi) という愛称までつけられたミイラ状の遺体は詳細に科学的分析をされて、今から 5300 年前に死亡し凍結した男性であることが判明しました。現在はイタリアのボルツァーノという町の南チロール考古学博物館⁶でケースの中に入っています。復元像もいくつかあり、よく編まれた皮の靴、毛皮の上着、弓矢や斧など当時の生活が分かります。胃腸の内容物や、ポシェットには薬草が検出されま

したが、ついに文字らしき書き物は発見されずに調査は終わりました。

さて、歴史言語学では『基層(substratum)』という地質学の概念を借用した研究方法があります。ロマンシュ語のルーツにはおそらくはこのアイスマンの仲間の話していた基層的な先住民の使う言葉があったと思われます。19

⁶ 図 5 の復元像は <http://www.bolzano.net/mostra/oetzi20.html> を参照した。

世紀には『アルプス基層説』と称されるヨーロッパの古層言語を想定する学説が流行りました。ヨーロッパはかつてアルプスを中心とする広大な地域に一つの、あるいは非常に近い数民族が住んでいて、東はグルジア、西はバスクの方に海拔 2000 メートル前後の帯を拡げると、そこには共通の特徴が確認できるのではないかと、という仮説でした。しかし現代知りうる西のバスク語と東のコーカサス地方の言語とアルプス先住民の言語（?!）との研究をすればするほど根拠が薄弱となり、あえなくして実証されないままにどこか消えてしまった、そういう仮説でした。しかしながら、もし古代の文字資料がどこかに見つかったら、と想像するとわくわくしてきます。

ロマンシュ語のルーツに関わる歴史資料はローマ時代以降の豊富な記録から参照できます。まず地中海沿岸から始まったローマ帝国の拡大は内陸部に進み、現在のフランスに相当するガリアは征服され、イベリア半島、北アフリカからトルコへと地中海沿岸諸地域をとりこみました。ロマンシュ語とは、紀元前後のローマ帝政の最高潮の時期にローマ人征服者・植民者が使う口語ラテン語の強い影響を受けた先住民の言語が発展したものだと考えていいでしょう。紀元前 15 年のローマによる征服後数百年でどこまで進化したかは不明ですが、4 世紀の末になり、東の方から屈強なフン族に押される形で諸民族が移動してきます。今で言う難民のように移動し新天地を求めてくる。当然、ユーラシア大陸の西の果てに吹き溜まり、定住します。これらゲルマン系諸民族が各地で法制度や社会の秩序を制し、城郭都市群を築いた結果、今のヨーロッパの原型が形成されました。

アルプスの急峻な峠道はその激変期のなかで孤立していたというよりは交通の要衝であった。最も高い峠の近くにあるサンモリッツは宿場町でローマ時代から温泉（鉱泉）浴場がありました。当時の世界の分け方は、ローマの支配者から見て、ヨーロッパは「アルプスのこちら側」と「アルプスを越えた側」と二分されました。当然、その峠道はラテン系の民族やゲルマン系の民族を含む多言語の人々が通らないわけがなく、スイス・アルプス地方が言語的にもロマンスとゲルマンとの接点にあったのです。アルプスの谷間に点在する村々は南ヨーロッパのイタリア半島と北の世界を結ぶ幹線として物資のみならず、つねに人間や言葉が行き交う場、「ピジン」（Pidgin）が盛んに発生する言語のるつぽになります。

一般的に、言語接触の種別のなかで、複数の言語使用の場面が非常に散発的で、その都度その都度、何かの実際的な必要に迫られて一停泊した港でお金の勘定をする、あるいは飲食の接待をする、など一時的に生まれる言語上の方便「ピジン」があります。皆さんは『横浜ピジン』という言語をご存じですか？横浜ピジンというのは言語学の重要文献⁷にも出てきます。私は戦後の横浜生まれなのですが、確かに今になって思い出すと、中学生の頃見かけた飲み屋街の看板に英語とは違う変な字があって、『あれは何だろう？』と不思議に思うことがありました。たしか『ポセイドン』とか、『アテネ』とかの店名で、ギリシア船員のおもてなしの酒場であったらしいのです。今となっては、そういう店の中では一体、どういう言葉話を話していたかと考えると面白いのですが、必要最低限のコミュニケーションということであれば単語をつなげて、文構造は完成されなくてもいい、と。発音もお互い、ある程度の範囲の中で調整しながら、相手に適応させていって、『多分こう言っているんじゃないか』という想像力を働かせ、コミュニケーション上の努力をしながら、お互い歩み寄るといふ言語行動があつたに違いない、と思います。残念ながら、横浜ピジンは現在死語となったとの記述があります。

さてロマンシュ語の形成、つまり『ロマンシュ語はどのようにして生まれたのか？』という設問に戻りますと、ロマンシュ語にもそうした（話し言葉の）ラテン語と直接触れ合う初期の成長過程の時代があつて、少しずつ変容しながら世代を超えて伝えられた。つまり、ロマンシュ語はラテン語からの一種の「クレオール（クリオール）」（Creole）です。クレオールというのは、言語接触の結果生じた混交的な言語で、一時的な使用状態から定着して母語化し、親子代々へと引き継がれて連綿と発展してきた言語です⁸。

次の時代のゲルマン語に影響を受けた時も同じで、すでにラテン語化を終えたロマンシュ語が、ゲルマン語との接触下でピジン状態から徐々にクレオール化していった。先住民の言語『基層（substratum）』がラテン語に覆わ

⁷ 細川弘明「ピジン・クリオール諸語」『言語学大辞典第3巻 世界言語編（下-1）ぬ-ほ』亀井孝・河野六郎・千野栄一編、三省堂、1992. 参照。

⁸ 富盛伸夫「ロマンシュ語」「レト・ロマンス諸語」「ラディン語」『言語学大辞典第4巻 世界言語編（下-2）ま-ん』亀井孝・河野六郎・千野栄一編、三省堂、1992. 参照。

れて原型が成立したのに対し、それ以降はゲルマン語『上層 (superstratum)』からの影響関係があったと考えます。

ヨーロッパ中世初期にキリスト教の制度化が深化してゆく一方で、アルプス地方では宗教上の分断がありました。中世初めから司教座がミラノからゲルマン語圏の町クール (Chur) に移されると、アルプスの人々は南より北を向くようになり、ドイツ語の使用拡大が進みました。9世紀中頃、カール大帝の死後にベルダン条約の分割があり、アルプス地方はロテール(ロタリウス)が制覇していた南北に長い中部のライン川流域に沿ってドイツ語が影響力を強めていくこととなります。つまり、話者は相当長い期間、二言語併用状態で生活し世代交代をしてきた間に、ロマンシュ語の初期原型に上からゲルマン語的要素が覆いかぶさるようにして変化した言語だ、ということになります。最も古いロマンシュ語の文献は中世後期の土地紛争にからむ裁判の証言記録ですが、すでに、次章に述べる、ロマンス語系とは違うゲルマン語的な特徴も見え始めています。

5. ロマンシュ語におけるゲルマン語的要素

ここで、ロマンシュ語の文法に見られるゲルマン語的特質を紹介しましょう。以下の2つの統語論的現象は絡まっていて言語学的説明も複層的です。

ロマンス諸語の源であるラテン語と異なり、ロマンシュ語は語順が一定の規則に従っています。なかでも文構成上の「定動詞第二位置」という原則が統語論上の特徴です。他動詞平叙文の基本語順は英語と同じSVO (主語・動詞・目的語) ですが、ロマンシュ語の文もこれと全く同じです。まず初めに主語があつたら、平叙文では迷うことなく次に動詞がきます。最初にくるのが副詞 (句) であっても次に動詞がくることには変わりなく、その次に倒置された主語が続く、非常に安定した構成を示します。この現象は隣接するドイツ語とも共通しておりゲルマン語的特徴のひとつに挙げられます⁹。

第二には、文主語の義務的明示です。動作者の意思の反映しない天候などの自然現象や状況文にも形式上の主語を立てることが普通です。英語の «*It is hot today.*» のように、形式主語をたてないと文として成立しない「主語表

⁹ 富盛伸夫「スイス・ロマンシュ語における言語接触の諸問題 -いわゆる「V/2 語順」について-」『ロマンス語研究』42号, 21-30, 2009.

示の義務化」という文構成上の規則については、英語やドイツ語とロマンシュ語は全く並行した特徴を示します。フランス語では形式主語として3人称単数形の *il*、ドイツ語では *es* が使われますが、このダミーの主語を動詞の前に置くことで文を整える言語は世界の言語の中でも少数派で、ロマンシュ語は英語、ドイツ語、フランス語などゲルマン語の仲間です。定動詞第二位置と主語の明示義務の観点から、西ヨーロッパ諸語は二分されるといえます。多くのロマンス諸語は比較的、この縛りは緩やかですが、例外はフランス語とロマンシュ語を含むレト・ロマンス系言語です。この点からみれば、フランス語もロマンシュ語もゲルマン語的特徴を共有しているといえるでしょう。

例1 (ロマンシュ語) *Id es mezdi*. 「お昼だ。」

Cf: (英語) *It is noon*. (フランス語) *Il est midi*.

Cf: (イタリア語) *È mezzogiorno*.

例2 (ロマンシュ語) *I plova*. 「雨が降る」

Cf: (英語) *It rains*. (フランス語) *Il pleut*. (ドイツ語) *Es regnet*.

Cf: (イタリア語) *Piove*. (スペイン語) *Llueve*.

次は、形式主語をたてて受動文を作り、新情報と焦点化を強調する非人称受動態の例¹⁰です。

例3 (ロマンシュ語) *Id era miss ora las binderas, id era propa di da nozas*.

「そとには旗が掲げられていました。まさに婚礼の当日であったのです。」

Cf: (ドイツ語) *Es waren Fahnen ausgehängt, es war wirklich Hochzeitstag*.

形式上の主語 *Id* (中性代名詞・単数) がたてられることで、婚礼を祝う「旗」が新情報(レーマ)として提示され、焦点化が同時になされています。ただし、論理意味上の被動項 *las binderas* 「旗」(女性複数)は、二重下線部の動詞 *era miss* の性・数(男性・単数)と一致しておらず、補語の地位

¹⁰ Uffer, Leza *Las Tarablas da Guarda, Märchen aus Guarda*, Basel, 1970. p.44 より引用。ドイツ語訳は Uffer による。一部は、「ロマンシュ語圏の民話」(富盛伸夫訳)『スイス民話集成』スイス文学研究会編、早稲田大学出版部、1990. 所収。

にあると解釈されます。ただし、ドイツ語の対応文では、単数形の形式主語 Es と動詞複数形 waren は一致せず、この動詞 waren は意味上の主語 Fahnen 「(複数の)旗」に一致しています。後半の節でも、形式主語 id を用いて「時」に関わる非人称構文、焦点が propa di da nozas 「まさに婚礼の日」にあたっています。ここでは詳述できませんが、ドイツ語やフランス語と同じく、自動詞受動文を構成して焦点化の機能をもたせることも可能です¹¹。

現代の言語学者 D. Perlmutter¹²は、上述の類型を持つ言語を Type-A Languages と呼んで特別なグループとします。Type-A 言語の主な特徴は『動詞が2番目にきて、義務的に文主語を置く』ことですが、その要件を満たす言語を数えたら世界の数千言語のうちでも西ヨーロッパのゲルマン語系に属する十数言語しかない、という。有名な『サピア=ウォーフの仮説』の B. L. Whorf (1897-1941) はかつて、主語を必ず文構成要素として必要とする言語を SAE (Standard Average European) と命名して言語研究の標準には不適な特別なグループとしました。同様に松本克己氏¹³は、英語やその他の西欧のゲルマン語系言語を基準に世界の言語を考えたら無理が生じるのではないかと、ましてや、チョムスキーの生成文法のように、文には必ず主語があって動詞が2番目、語順は SVO であって、という言語類型をモデルにしてしまう考え方には無理があるということを述べています。ちなみに、18世紀フランスの思想家 Antoine de Rivarol (1753-1801) はフランス語の優位性についての論文で、『明晰ならざるものフランス語にあらず』という有名な主張を展開しました。何が明晰かというと、17世紀のデカルト派哲学を抛り所に『論理的語順とは「主語・動詞・目的語」—これ以上明晰なもの』はない、と言うのです。これは人間の「普遍性」と結びつけて考えていた17世紀・18世紀の時代思想ですが、20世紀にチョムスキーは自らの言語理論をデカルト的言語学と呼んで生成文法の論拠にしています。

なお、ロマンシュ語の音声・形態論などについては上掲の東京外国語大学言語学研究所のサイトから先行出版物を御覧ください。

¹¹ 富盛伸夫「レト・ロマンス語エンガディン方言における受動態の諸問題(II)」『東京外国語大学論集第48号』, 1-19, 1994.

¹² Harris, Martin & Nigel Vincent (ed) *The Romance Languages*, 1989. P. 384. 参照。

¹³ 松本克己『世界言語への視座 歴史言語学と言語類型論』三省堂, 2006.

6. 少数者言語ロマンシュ語の擁護と復興の試み

ロマンシュ語はその形成の地政学的な歴史をみれば、政治的な自立は保ちながらも常に北からの経済的、社会・文化的な浸蝕にあい、それが言語的にも独自性を保ちにくくさせてきたということがわかります。1880年の国勢調査ですでに1.4%（38705人）であった言語人口比率は次第に減っていきます。経済の交流、特にアルプスを縦横に結ぶ鉄道の開通とともに20世紀初頭から勃興した観光開発は、地場産業として地域経済を潤すようになります。当時ロマンシュ語の単一言語話者であった世代は、夏も冬も北からの観光客を相手にドイツ語を話し、職業生活のみならず教育言語もドイツ語が圧倒的に優位になりました。

スイスは20世紀の世界大戦間に最大の存立の危機を迎えます。ナチスとムッソリーニの両政治的勢力の狭間で国土の開放を迫られた小国スイスの人々は、スイス独自の言語ロマンシュ語を護ることを象徴として自国の存在理由と自立の権利を主張しました。ロマンシュ語を擁護するというのがスイスを守るのだという、情緒的な飛躍はあるものの、これが合言葉となってスイスの人々は結束した。こうして1938年、憲法改正の国民投票でロマンシュ語はスイスの「国語」とであると明記されたのです。

この時期によく引用されたのが、エンガディン溪谷の小村セント（Sent）出身のペイデル・ランセル Peider Lansel（1863-1943）の詩文です。

«Ni taliaun, ni tudais-ch,
Nus vulain rester rumantschs!»

「イタリア語でも、ドイツ語でもなく、
わたしたちはロマンシュ語の人間で
あり続けたい。」

現代ロマンシュ語で書いた最大の詩人と言われるランセルは、「タマングール」(Tamangur)という題の長い詩も作りました。タマングールというのは地名でスイスの東端、スイス国立公園内の高度2000mほどにある森林の名前です。自然のままに雨が降って土石流が起きて木々が傷んでも人間の手を加えない。かつて広く繁っていたタマングールは今荒れ果てて瀕死の様だ、ロマンシュ語もまた、人々がすべきことをしないとこの森のようになってしまいうだろう、、、と。しかし私には詩をとおしてランセルの祈りのような気持ちは伝わってきます。タマングールの松の根のように嵐で流されても、必

ず新たな芽を吹くのだ、生命のもつ自己治癒力を信じよう——そういう祈りのような詩なのではないかと¹⁴。

私はかつてこの詩文を日本語に訳そうとしてじっと見て口ずさんでいたら、はっと気がついたことがあり、一大仮説を作りました。「ロマンシュ語」の綴り (lingua) rumantscha [rumantʃa]を解体して組み換えると詩の題名、森の名前 tamangur [tamangur] の音に近いのではないか？アナグラム (anagram) のように綴りに隠された別の記号が意味を持つのではないか、と。ロマンシュ語特有の破擦音 /ʃ/ は -tsch- や -tg- という綴りで書かれるので、まさにペイデル＝ランセルは詩作の時に、tamangur と rumantga とに通底する響きを感じ取っていたのではないか、無意識下に連想が働いたのではないか、と思います。これは私だけの妄想かもしれませんが。

さて、この頃からロマンシュ語を話す人々の間に、外からの言語勢力に流されるままではいけない、ロマンシュ語に新たな生命を与える努力をしなければならぬ、という長い粘り強い試みが生まれました。谷ごとに細分化した地域方言間の垣根を低くすることと、新しい時代に必要な単語を作るという方向です。

第一の試みはロマンシュ語方言間にある差異を超えて共通語を作ろうというものです。私がジュネーブ大学で習った Leza Uffer 先生は中央グラウビュンデン州のスルミラン (surmiran) 語の話者でしたが、ロマンシュ語の統一を中央に位置して共通点の多いスルミラン方言を標準語化しようと運動されていました。どの谷にも言語リーダーがおり、それぞれ自分の方言を基盤に共通語化を構想していたので、意見の一致から程遠いものでした。そうした中で 1982 年チューリッヒ大学教授の Heinrich Schmidt 教授(1921-1999) の提唱した「グラウビュンデン・ロマンシュ語」(Rumantsch Grischun [rumantʃ grizon] 「ルマンチュ・グリジュン」) は書き言葉の共通ロマンシュ語として広く賛同を得ていった。異論が少なかったのは折しも憲法条文の改正で公用語へと昇格させようという運動がたかまり、そのためにも統一的文章語が必要とされていたこともあります。新しい憲法法案には人権条項とともにロマンシュ語もその言語権が明記され、1999 年国民投票、2000 年施行となり、

¹⁴ 富盛伸夫「レト・ロマン語の詩」『スイス詩集』スイス文学研究会編、早稲田大学出版部、1980。

条件付きであります。ロマンシュ語は「公用語」へと地位を高めることができました。

憲法第4条【国語】国の言語は、ドイツ語・フランス語・イタリア語・
ロマンシュ語とする。

第18条【言語の自由】言語の自由は、保障される。

第70条【言語】1. 連邦の公用語は、ドイツ語・フランス語・イタリア語
である。ロマンシュ語も連邦がロマンシュ語の人々と関係を
維持する上では公用語である。（以下、略）

ロマンシュ語は他の3言語と全く対等な権利と義務は生じないが（ベルンの連邦議会で必ずしも通訳・翻訳業務を課さない、など）、この言語を使用したい人々とのコミュニケーションの場では「公用語」に準じた扱いで、現実的な無理のないこの条項の精神は国連やEUの少数者の人権を尊重する憲章にも沿ったものとなっています。

私自身、1970年代から現地の人々の動きに交わり傍らから注目していたことがあります。グラウビュンデン州の州都クールに本部を置くロマンシュ語振興団体 Lia Rumantscha が中核となって教員、ジャーナリスト、言語学者たちによる「言語委員会」（Commissiun linguistica）を組織しました。いわゆる現代用語、時事用語、職業上の専門用語はもともとロマンシュ語にはなかった語彙なので新たに造語しなくてはならない。多くは世界に流通する単語をロマンシュ語化することで事足りる場合が多いものの、身近な単語がまだロマンシュ語にはできていないこともある。例えば「ハンググライダー」は観光産業に重要です。英語から借用することもできますが、自分たちの言語でも言いたい。が、単語がまだない、という状況です。この点、ドイツ語は便利で、「ハンググライダーする人」は Deltaflieger、動詞にすると -fliegen、「ハンググライディング」という名詞には -flug と語形変化すればいいのです。ところが、ロマンシュ語はそれができない。ロマンス系の造語法に従い、動詞は svouler a delta（デルタで飛ぶ）と分析的に言わざるを得ない。そのため「ハンググライダーをする人」の単語は長く svouleder a delta となります。そこで言語委員会は「スキーヤー」skiunz にならった造語をして deltunz を提案しました。このように、新しい事物に対して新しい概念を自分たちの

言葉でとにかく作らなければ、外来語にお世話にならざるをえない。外来語の借用はスイス・ドイツ語ないしはドイツ語を飛び抜けて英語からというケースも多くあります。

その一例をあげると、冬季観光に欠かせない「スキーリフト」は、罗曼シュ語的には *lift da skis* と分析的に言うこととなります。いかにも外来語を罗曼シュ語風に直しただけ、という批判も多かった。そこで専門委員会は *runal* という単語を提案しました。昔は、干し草をアルプという高山の牧草地（アルプスの語源）から村に降ろすのに、荷車が使えない急斜面ではロープウェイでやっていた。スキーリフトがそれにそっくりなので、すでにある *runal*（干し草運搬用ロープウェイ）を使ったらいい、というもっともな理由です。私はこのような専門委員会提案の単語を一般の人々に聞いて回ったことがあります。アンケートの結果、*runal* にはほとんど賛同者がいなくて、英語のままの *skilift* でいいじゃないか、という回答でした¹⁵。このあたりが言語政策とは別次元で生きる生活者の感覚の偽らざるところではないでしょうか。

7. ロマンシュ語の未来に向けて

20 世紀に入って、罗曼シュ語研究は辞書編纂によって格段の進展を見せました。スイスの言語研究には「モノとコトバ」を連関させて研究する民俗学的言語記述の伝統

があり、他の言語地域（ドイツ語・フランス語・イタリア語）と並行して、方言（パトワ・レベルまで含む）の採集と記述研究の地道な作業が100年がかりで進んでいます。グラウビュンデン州の罗曼シュ語領

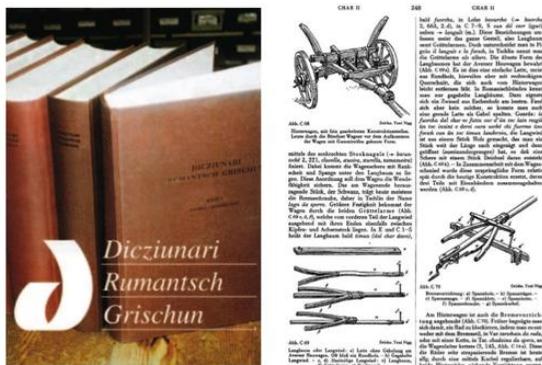


図6 *Dicziunari Rumantsch Grischun*

¹⁵ 富盛伸夫「罗曼シュ語・エンガディン方言における新語の形成過程について--調査ノートから--」『吉沢典夫教授追悼論文集』, 255-265, 1989.

域ではクール市にある辞書研究所で 1904 年に編纂準備を始め、1939 年に *Dicziunari Rumantsch Grischun* の第 1 巻発刊、現在 13 巻目でやっと MA-の項目まで刊行が進み、現在も優れた言語学者たちが継続して続けている息の長い国家事業です¹⁶。

上述の言語史的遺産の記録といえる辞書とは別に、現代生活に必要な語彙を集めた大辞典 *Pledari Grond* 『ロマンシュ語大辞典』が Lia Rumantscha から出版されました。1980 年から 30 年をかけて新たに収集あるいは造語した現代用語の集大成で、共通ロマンシュ語 Rumantsch Grischun の語形の他に 5 つの方言形や文法項目も加えて編纂された大部な辞書ですが、現在ではすべてオンライン化して無料で検索可能な電子辞典¹⁷となっています。

現代のスピードにマッチして特色のあるボランティアベースの辞書 *MesPledaris* も注目すべきです。名前が複数形なのは複数の方言版がリンクされているからで、そのほか、*MyPledari*¹⁸ という英語のバージョンまであり、世界のロマンシュ語話者、研究者にも視野を拡げています。さらに面白いのは、母語話者の人のコメントが随時書き込めるフィールドが用意されており、「自分はこういう意味で使う」、「発音はちょっと違うぞ」、あるいは「こういう例文見つけた」とか、リアルタイムで修正しうるインタラクティブな機能も持っています。私はいつもひとりであちこちの方言やことわざの調査をしてきましたが、孤軍奮闘には限界がありました。サイトを訪れるユーザーがネット上の辞書編集局に直接書き込める作りにしたのは素晴らしいと思います。これに専門家のフィルターを加えられれば、ロマンシュ語に限らず、こうした方法こそこれからの辞書作りとして理想的かと思います。

スイスに留学生としてゆき現地調査をしていた頃から、ロマンシュ語の未来というのはそんなに悲観するものではない、と感じていました。言語復興運動の現場では危機感を持つあまり、歯が弱って一本ずつ抜けるかのような、あるいは上述の詩のモチーフのような森林破壊のイメージで語られてきました。たしかにそのおかげもあって憲法で地位が規定され、現地の幼稚園と

¹⁶ *Dicziunari Rumantsch Grischun*, Institut dal Dicziunari Rumantsch Grischun, Chur, 1939-. 図 6 も <https://www.drg.ch/dicziunari.php?language=D> を参照。

¹⁷ *Pledari Grond*, <http://www.pledarigrond.ch/rumantschgrischun/>

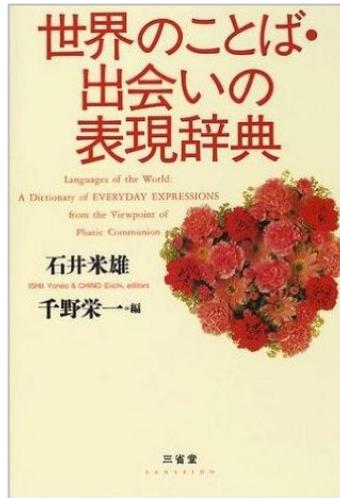
¹⁸ *MyPledari*, <http://www.pledari.ch/mypledari/>

小学校ではロマンシュ語を教育言語として子供たちに根づかせて、世界の言語の中では「すぐに消滅の危機にある言語」から少し脱してきたようです。しかし、現代ではインターネットの急速な普及によりコミュニケーションの様態が劇的に変化しています。下に紹介したフェイスブックのようなネットの世界では、今を生きるロマンシュ語話者が個人として自分たちの言葉を新たな時代に作り変えてゆく、創造的な言語生活が始まっているような気がします。ロマンシュ語を過去の遺産として護るだけでなく、必要であれば異質な要素もどんどん取り込んで変容してゆくことを恐れない前向きの構えが、言葉の生命力を活性化するのではないかと思っています。言語研究者の眼からは、ロマンシュ語は一種のクレオールになっても必要に応じて姿を変えつつこれからもずっと生き続けるにちがいない、それでいいのではないかとまで思います。英語やフランス語、そして日本語ももともとそうですから。

(完)

ロマンシュ語	英訳
<i>Allegra.</i>	- Hello or welcome
<i>Co vai?</i>	- How are you?
<i>Fa plaschair.</i>	- Pleased to meet you.
<i>Bun di.</i>	- Good morning.
<i>Buna saira.</i>	- Good evening.
<i>Buna notg.</i>	- Good night.
<i>A revair.</i>	- Goodbye.
<i>A pli tard.</i>	- See you later.
<i>Grazia fitg.</i>	- Thank you very much.
<i>Anzi.</i>	- You're welcome.
<i>Quants onns has ti?</i>	- How old are you?
<i>Viva!</i>	- Cheers!

図7 ロマンシュ語 (Rumantsch Grischun) の挨拶表現



… * * * ————— * * * …

ロマンシュ語は2000年1月1日にスイス連邦の新憲法でスイスの4つ目の「公用語」（その制約条件などは本文参照）となった。公用語に昇格するためには、自分の方言こそが公用語の資格がある、いや、そうではない、と喧嘩しては始まらない。少なくとも3つは（細かく分類すると5とも6とも）ある地域方言の間に共通項を見出して、誇り高いロマンシュ語を用いて公の場で演説したり通訳・翻訳したりできるようになったのだ。ロマンシュ語の書き言葉は16世紀の聖書翻訳から始まったが、それ以来、辞書や文法書が方言ごとに編纂されたため正書法が複数競い合い、そのどれもが正統性を主張してきたのがロマンシュ語の近代史といえる。

こうしたある意味で不毛な競争に終止符を打ち、大義のために最大公約数的な新しいロマンシュ語を作ってこそ公用語の地位を確保できるのだ、という認識が共有され始めたのが1980年代だった。チューリッヒ大学のロマンス語学者 Heinrich Schmidt 教授 (1921-1999) はグラウビュンデン州のロマンシュ語方言話者の意見も多く取り入れて書き言葉としての共通ロマンシュ語「グラウビュンデン・ロマンシュ語」(Rumantsch Grischun 「ルマンチュ・

グリジュン」)を提案した。この言語学者による「人為的・人工的」な言語にはすべての方言話者にとって多少の違和感があったのは事実だが、軌を一にしてロマンシュ語の公用語化運動が盛り上がっていたこともあり、この新ロマンシュ語は公用語に認定された唯一の文章語として2001年からはグラウビュンデン州の公式の言語のひとつとして採用されることとなった。

ところで、石井米雄・千野栄一両先生編集の『世界のことば・出会いの表現辞典』(三省堂、2004年)というユニークな本がある。かつて言語学者ロマン・ヤコブソン(Roman Jakobson)は実際の言語使用に関わる機能を分析して人と人の心をつなぐ機能を *Phatic function* として独立させたが、この「出会いの表現」辞典はまさにそこから着想をえて、言語による情報伝達以前に交わされる挨拶や感情の表出する表現を世界59の言語から集めるという画期的な発想から生まれた。

そこに少数者言語のグラウビュンデン・ロマンシュ語を加えてくださることになったものの、準備を始めて筆者ははたと行き詰まってしまった。まだ誕生したばかりの言葉では世に出た小説や戯曲はほとんどなくて実例が集まらないし、ましてや私はロマンシュ語で人を罵ったことはない。また『おつかれさま』などと言って人をねぎらう習慣はそもそもロマンシュ語にはないようだ。そこでスイス・グラウビュンデン州の主都クール市にあるロマンシュ語振興の中心地に行って聞いてみることにした。出版が始まった会話の手引きなどでは「品の良い」文例しか載せられてなく、普通に使う(かもしれない)叱ったり罵ったりする言葉は見当がつかなかったからだ。

訪問した「ロマンシュ語連盟」(Lia Rumantscha)は消滅の危機にあるロマンシュ語の保存・復興のため、言語研修や出版事業をはじめ様々な活動を行っている団体で、筆者の調査依頼に親切に応じてくれた。「出会いの表現」のなかでも、「電話の応答」「もしもし」は *Halo!*「アロ」。これは、綴りは別として同じ音はヨーロッパ諸語では多く使われる表現だ。しかし、喧嘩を売ったり買ったりするような罵り言葉となると、ロマンシュ語連盟の人々も困り始めた。できたばかりの新ロマンシュ語ではまだ使ったことがないらしい。彼らの間にひそひそ話が始まり合議の結果、「叱るときのことば」は *Tge fas!*「チェ・ファス」(お前は何をしているのだ!)、「罵るときのことば」は *Ignorant!*「イニョラントウ」(物知らず者め!)、「ことばにつまった

ときのことば」は Ah, ah... 「アー, アー」など、その場で作ってくれたのだ。

上掲書では「まだ生まれていなかった表現で、綴りも不安定」である旨の断り書きをコラムに書いて掲載させていただいたが、当時この本の企画によって初めて誕生した喧嘩言葉が、果たして、現在どの程度人口に膾炙しているかは寡聞にして知らない。もっともあまり使ってほしくない表現ばかりかもしれないが。

